

未来のため、私とあなたが今、すべきこと

掛札 逸美（心理学博士。保育の安全研究・教育センター）

小学生の時、図書室でいったい何回読んだか、わからない本があります。長崎の被爆を描いた『8月がくるたびに』（1971年。文・おおえひで、絵・篠原勝之）。今ある新版とは図版がまったく違い、旧版は今でも衝撃的かもしれません。私が社会の理不尽さを考える時、根幹にいつもあるのがこの本です。

コロラドの大学院に入って数か月後、39歳の時、交通事故に遭い、それをきっかけに安全の心理学が私の専門になりました。おわकारの通り、戦争同様、不慮の事故も理不尽の極致です。「どうしてこんな事故に?」「なぜ私が?」。

人間の脳は理不尽を許せないので、「なぜ?」を考えます。「大ナマズが暴れて地震が起こる」も、現代科学がなかった時代の因果の考え方。私たちも原因を考えようとして、たとえば、そのできごとの過去に遡ろうとします。でも、「なぜ?」「どうして?」をいくら問うても、起きたことを起きなかったことにはできません。そして、「どうして?」（原因の探索）は、「これからどうする?」（解決策の策定）には必ずしも、つながらないのです。

今の私の専門は安全のための社会心理学ですが、大学院に行くまで仕事をしていた場所は健康診断団体、公衆衛生の世界でした。公衆衛生の世界では「なぜ?」よりも「どうすればいい?」が大事です。たとえば、新型コロナウイルス感染症がどんな病気なのか、完璧にはわからなくても対策は考えられる。がんがどうして生じるのかわからなくても、早く見つけて取り除くことはかなりできる。

事故も同じです。交通事故が起こる原因は多様で、そもそも鉄の塊がすごいスピードで走っているわけだから、「なぜ」を考えていたら、「車をなくせ」になってしまう。そうはいきません。だから、車は必要だという前提で「どうするか」を考える。同じように、子どもが食べ物の誤嚥窒息をする時に「なぜ詰まる?」ばかりを考えていたら、すべて流動食にしなければならなくなる。だから、「詰まる」を前提に「すぐ救急車を呼ぶ。気道異物除去をして、心肺蘇生もする」。…「なぜ」と「どうする」が別物、という場合は多々あります。

もっと広く考えてみましょう。保育や教育の一面をとってみても、どうしてこんなにいろいろ問題があるのか。「なぜ?」を考えていたら、日本の歴史を全部見直すようなことになってしまう。見直すことは大事でしょうけれど、「どうする?」にはたどり着かない。たとえば、70年前のできごとが今の日本の保育の問題の原

因だとしても、それをどう語ったところで、今の問題は解決できないのです。仮に70年前や50年前に戻って、たとえば1歳児の配置を3対1にできたからといって、今ある保育の問題は解決しません。ことがらの因果というのは、決して直線的關係ではなく、1対1の關係でもないからです。

もっと大きな問題もあります。たとえばいつ、世界戦争が始まっても不思議はない(世界には1万3000を超える核弾頭がある)。あるいは産業革命以来、人類が起こしている気候変動(地球温暖化)。このままいけば、気象災害はどんどん悪化していく。そして、日本の国際競争力、つまりヒトの力は年々下がっている。戦争や大災害をきっかけに、日本が貧困国に陥るリスクは決してゼロではない。「なぜ」を考えている場合ではないような「どうする?」がたくさんあります。

「戦争も気候変動も、私一人の力では止められない」、そう考える人もたくさんいるようです。でも、明日の世界、30年後、100年後の地球に影響を与えるのは私たち一人ひとりであり、30年後、100年後のおとなたち(今の子どもたち)が「なぜ?」とその時思っても、昔のおとなたち(私たち)を変えることはできないのです。今の世界を変えられるのは、私たちだけ。ところが、人間はたいいてい、自分の10年後のことすら考えられません(私の大学の専攻は林業経済学でした。100年後、200年後を考えて森を育てるのが、林業です)。

「自分には無理」「何をしても無駄」...、そう思うあなたは、たとえば、アフガニスタンの過去20年の歴史をインターネットで読んでください。学校へ行くなんてありえなかった女の子たちが学校に通い始め、2018年、大学生の24%は女性でした。子どもたちは毎日、何時間も歩いて学校に通い、そこから大学に進む女性がたくさんいました(New York Times, 2019年6月27日)。教育の価値と権利の大事さを知っているアフガニスタンの若者たちが、今、黙って20年前に戻るはずはありません。そして、この若者たちが子どもだった時、「働け」と言わず、学校へ通わせたのは? 学校に行けなかった親たちです。「自分にできなかったことこそ、子どもたちができるように」、そう思うかどうかはあなた次第です。

インターネットで情報や知識が簡単に手に入る今、教育は知識を教えることではありません。さまざまな学び方や考え方を教えるのが教育です。「自由ってなに?」「なぜ、戦争が起こるの?」「こんな道具を作ってみたい」「これについてみんなで考えたい」と思った時に使える道具を渡すことです。つまり、言語と「言語を使って考えるスキル」。もちろん、情報の中には嘘も山ほどありますから「情報を疑うスキル」も大切です。これは英語で言う **critical thinking** (クリティカル・シンキング)、「自分の思考も含め、正しく疑ってかかるスキル」です。

日本の教育(保育)は、こうしたスキルを渡す形になっているのでしょうか。

『3000万語の格差』（ダナ・サスキンド著）を訳した者としては、「なっている」とは言えません。おとなの言葉は日に日に貧しくなっていて、「知りたい」「してみたい」「本当？」「みんなで考える」はおとなの間でも減るばかり。本来、子どもが育つ主たる場所であるはずの家庭もしかり。なにより、教育の価値は落ちるばかりで、教育を受けられること自体が、世界では当然の権利ではなく「特権 **privilege**」だという事実すら、日本では忘れられつつあります。

どうすればいいのか。答えは、目の前にあります。子どもたちを見てください。「やだ、私がおもちゃを使っているんだから、貸さない」「やめて、じゃましないで」。子どもたちは毎日、イヤはイヤ、ダメはダメと言っています。「貸してあげなさい」「仲良くしなさい」でおさめていいのですか？ 理不尽だけど、先生が言うから貸す、譲る、謝る。それで育つのは「理不尽だ」と感じる気持ちを抑える力、言いたいことを黙っている力だけ。理不尽を議論や交渉で解決するスキルは身につきません。子どもはコミュニケーション能力が未熟、それは事実です。でも、この文化が身につけさせるのは「言いたいこと、言うべきことを言わないコミュニケーション能力」ばかり。正直、この文化のおとなは子どもより劣っています。

自我を育てている最中の小さい子どもたちから、私たちは学ばなければいけない。イヤならイヤと言う。こうしたいならこうしたいと言う。子どもがそれぞれ「イヤ」「こうしたい」と言うなら、どうするかを話し合う。少なくとも英語の世界では、小さい子どもたちが日々、学んでいる方法です。ケンカをしてもいいけれど、ケンカをしたら痛いとわかっているなら話し合う。

これが、戦争を止める交渉力です。暴力や差別をなくすために「やめて」「差別だ」と言葉を発する力です。「どんなに小さい力でも、私は気候変動の影響を減らすために、こうする」と言い、実行する力です。自我が育っていないおとな、自我を表明できないおとなに、これはできません。ふだんもできないのに、いざ戦争だという時にできるのでしょうか？ 言えません、できません。

「わかっていると言えない」「したいけどできない」...、あなたはそうかもしれない。ならばよけいに、あなたの目の前にいる子どもを、「あなたと同じ、できないおとな」に育ててはいけません。あなたができなかったこと、できたら良かったと後悔していること、できるようになりたいことを、目の前の子どもたちはできるよう、育てていく、これがおとなの責務です。なにより、理不尽なことに理不尽だと言い、はっきり立ち向かうおとなを。そうしなければ、次に巨大な理不尽が迫ってきた時、抵抗もせず従うおとなを作ってしまうだけです。

（日本乳幼児教育学会第31回大会抄録と発表用原稿を改編）